Introduction of kids English
～　高等学校までの英語教育と未来のキッズ英語　～

English Education up to High School and Future Kids English

米　田　安　男
Yasuo KOMEDA

〈はじめに〉

今年度から奈良保育学院で勤務することになり、教員人生の中で初めて高等学校以外の経験をする。高等学校で34年間、外国語（英語）を中心に指導を重ねてきた。後半９年間は管理職（教頭・校長）として側面から英語に対して関わってきた。近年、急速に進んだコンピュータテクノロジーを如何にして使いこなすかが令和の時代を生き抜いて行くキーとなることは揺るぎのない事実である。令和２年は新型コロナウイルスの拡散により、教育現場では凄まじい取り組みがなされている。無論、本学も同様で、対面授業から遠隔授業へのシフトを余儀なくされている。現在の状況が今後どの程度継続するかにもよるが、過去の指導方法を基本として、適切なICT教育とのハイブリッド化を進めることが必要不可欠であると考える。

１　高等学校までの英語教育

現在、30歳以上の皆さんは、中学校時代に英語を習い始め、高等学校卒業までの６年間、英語と悪戦苦闘を繰り広げてきたと思う。思い返すと小学校時代にローマ字を習い、訳も分からない状態から中学校１年生で“This is a pen.”を習ったように思う。当時は、「リスニング」のことを「ヒアリング」と言いながら授業が展開されていた。今になって「リスニング」と「ヒアリング」の違いは確実に説明できるが、当時はどうだったのかと疑問符がつく。また、“This is a pen.”が何故教科書の３ページ目に記載されたのか、英語圏ではこのようにして英語（母国語）を学んでいたのか、本当に不思議である。

更に日本の英語教育は、英文法が出来ていなければ試験や検定にも合格出来ないという「文法１番」という流れがあり、そのことばかりを意識して、ひたすら暗記に明け暮れていたと記憶している。

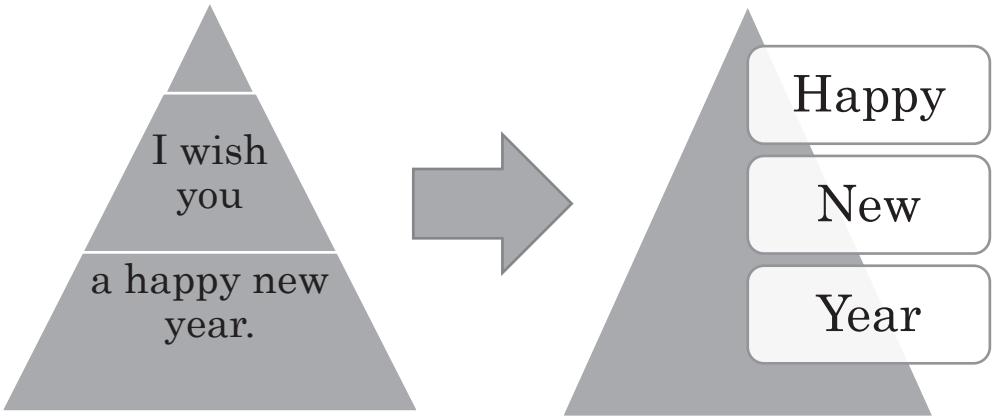
さて、ここ10年前頃から英語の４技能（speaking / listening / reading / writing）が大切だと広く叫ばれる世の中に変化してきた。当然、以前も同様の指導が大切だという認識はあったと思うが、現在のような状況ではなかった。また学習教材についてもカセットテープが主流で、先生がカセットデッキを教室まで持参し、巻き戻しを何回もしながら今で言う「リスニング」を行う状況であった。カセットのテープは早送りや巻き戻しをすると、テープが伸び、音声が変化し、何を言っているのか分からなくなるといった現在では考えられない授業を受講してきた。当然のことながら、現

在の生徒の皆さんには想像も出来ない事が日常茶飯事に起こっていたのである。今となれば懐かしささえあるが、もっと良い環境で英語を学習していればと思うこともある。現在は、カセットテープからCD・MD・NET・CLOUDと変化をしている。リスニング教材はどこにでも氾濫している時代に突入した。

次に当時の英語教育と現在の英語教育を少し比較してみる。例えば、導入として面白い話を1つ取り上げることとする。

面白い話①

今では正月に年賀状を送るという習慣が激減しているが、習いたての英語を使い、年賀状に“A Happy New Year!”と書いていた。その時は殆どの英語表記が、“A”を付けて書いていたのである。本当に面白いですよね。因みに正月前のクリスマスについても同じような話がある。“X’mas”というようにXとmの間にアポストロフィーが付いて看板等に書かれていた。事実、本来の英語表記“Xmas”となっていないことが現在でもある。



英文では、様々な新年のスタイルが人により存在するため“a”が入りますが、漠然とした１年を祝うと考えて区別する必要があると考えられている。同じような例として、“Good morning”がある。“A good morning”とは耳にしたことがないと思う。

上記のような事実を考察してみると、日本においては、テレビコマーシャルや雑誌の影響が非常に強いと想像できる。みんなが使っているから正しいのだと錯覚しているのである。以前、教壇に立ち生徒を指導する場合に最も注意をしていたことが、正確な英語を教えるであった。そのため教える側の先生は、紙の辞書を使い、必死で確認を取りながら教材準備をしていた。しかし辞書も100％正解とは言い切れず、２冊、３冊を使いセカンドオピニオン･サードオピニオンをとっていた。以上が当時の英語教育の一面である。

一方、現在の英語教育はどうかというと、インターネットの普及で様々な検索が瞬時に出来るようになっている。正しい英語なのか否かが、ネット検索で直ぐに分かる。テレビや雑誌の影響よりもPCやスマートフォンの影響が圧倒的に強い。間違い箇所を自らが時間を使い、徹底的に調べる

という作業はほぼ皆無である。調べることにより英語を覚えるということはない。全て検索して正解だけをみる。余計なことは覚える必要がないというスタンスである。その典型的な例が、文章校正ソフトの発達・進化である。PCやスマートフォンを使い、画面に自作の英文を入力すると瞬時に校正してくれる。確かに便利ではあるが、本当にそれで英語教育が成立するのか、疑問符がつく。

次に視点を変えて、英語テストについて考えてみる。

高等学校までの英語の試験は、文法を中心に穴埋め問題・長文読解問題・英作文並べ替え問題・会話問題・デフィニション問題等が主流である。何故このような問題形式になっているかは明白である。1979年に始まった「共通一次試験」が要因であることは間違いない。５教科７科目で合計が1000点満点。そのうち英語・国語・数学は200点と配点も高かった。その当時の学校では、共通一次対策が主流で、何れの学校も傾向と対策を作成し、対応に当たっていた。現在は1990年から始まった独立行政法人大学入試センターが行う「大学入試センター試験」に変わってきた。更に2021年より「大学入学共通テスト」が実施される運びとなった。このような知識詰め込み型の教育が長年実施され、「受験地獄」や「大学の序列化」という言葉を生み出す要因にもなった。

今年度から導入される「大学入学共通テスト」により、今後どのように英語教育が変化していくのか。また「Active Learning」の具体的な授業展開がどの程度、幼稚園や小学校で取り組み出来るのかを考えてみたい。

２　キッズ英語とは

前述した高等学校までの英語教育をどのように考えるか。現在、保育士・幼稚園教諭養成専門学校の教職員として、現状と今後のキッズ英語について考えてみる。

本学には付属幼稚園が同一敷地内にあり、その幼稚園では10年以上前から英語教育を取り入れている。高等学校に勤務しているALT又は幼稚園専属のALT教員が１週間に一度、幼稚園児に英会話を教えている。園児はいつも元気よく“Hi!”や“Good morning.”と大きな声で挨拶をしている。園児には大人や中高生が緊張する「間違ったらどうしよう。」、「通じるかな。」という思いは全くない様子である。ALT（Assistant Language Teacher）の言うことを一生懸命真似る。しかも、ALTはゲームやクイズを取りいれながら、楽しさを園児に伝える。したがって、幼稚園児に英語嫌いは存在しないと考える。これこそが“Kids English”であると考えている。言葉は「生き物」。自分の思いを相手に伝えるために使うツール。言葉は、生き物と同じように変化をしていく。中高生のように「〇〇日までに△△を覚えてきなさい。」という縛りもない。園児は俗にいう「スポンジ脳」を持っているため、一生懸命みんなで練習した英語を忘れない。この特性を活かそうと必死になり過ぎると、子どもの中で言語の渋滞が起こり、混乱してしまう。それを避けるための１つの方法として実践されていることは、確実に母国語（日本語）を理解させること。その上で家庭では英語、学校では日本語というようにシチュエーションを分けることが大切であると言われている。

ここで再度面白い体験談を取り上げることとする。

面白い話②

私の子どもが保育園に通っていた時の話である。保育園への送り迎えは家内と分担して行ってい

た。私が送り迎えをする時は、保育園までとにかく英語で話をしていた。子どもは最初キョトンとした顔で私を見ていましたが、ある日を境に英語の真似をするようになった。まだまだ日本語も十分でない時期でしたが、１年間続けた。するとある日、家内から次のように言われた。「子どもの日本語がなんとなく変なんやけど、何故かな。」と。私は家内に、「実は送り迎えの時に・・・」と答えた。すると「それが１つの要因かも知れない。」と即座に言われた。私はその時、「自分の思いを子どもに押し付けてしまった。」と強く感じたのである。まだまだ小さい子供に英語と日本語を同時に聞かせたことは間違いだったのか。また情報は提供するだけで、保護者が無理やり望む方向に持っていこうとすると拒否反応が起こることを知り、日本語をストレスなく話せない時期に実践することは難しいと強く思った。（当然個人差はある。）

その後、私は様々な方法をトライしているうちに、あることに気づいた。英語を好きにさせようとする場合には、保護者である私が、英語の歌を楽しそうに歌っているところを見せることや、外国の写真入りの本をリビングに置いておき、子どもに「触ったらダメ。」と何度も繰り返し言っておくことが近道だと。そうすると子どもはいつの間にか興味を持ち始める。実は私が父親に言われていたことなのだ。父親に「この本は絶対に触ったらあかん。分かったな。」と言われると、自然に手が伸び、触っていたことがよくあった。本当に驚きです。皆様も昔を思い出してみてください。

以上の体験談を参考にして考察すると、高等学校までの英語教育は、「型にはまった教育」であり、幼少期の教育は、「垣根のない教育」であると考えられる。

相手に自らの気持ちや意見を伝える時、上記のマトリックスが実現できれば、子どもたちは、自然に英語への垣根がなくなると考える。そのサポートをすることが私たち大人である。特に小さな子どもたちは、誰かの真似をし始めてからその物事に興味・関心を抱く。この興味・関心が「好奇

心」と呼ばれるもの。続いて、物事に触れることにより、「楽しさ」を感じるようになる。更に、言っていることが伝わると「嬉しさ」を感じ始める。ここまで到達すると心の中に「安心」が芽生える。以上のサイクルが非常に大切になる。このサイクルは、「型にはまった教育」ではなく、子どもたちが自ら感じ、吸収するものである。これこそが「伸びる教育」、幼少期における「Active Learning」だと考える。

幼稚園・小学校では、子どもたちが元気に先生の真似をして、何度も何度も英語を声に出すことが、最もスマートな英語教授法なのかも知れない。是非、担当の先生方には、同じような方法で諦めずに半年以上続けて実践して欲しいと思う。

ここで参考文献として駒沢女子短期大学の佐藤晶子先生が、同学の研究紀要（第52号）に次のような意見を述べられていることを紹介する。【保育者の関わりが、幼児の「達成欲求」「承認欲求」「楽しさ」「安心」「自尊感情」を満たすことを明らかにしたが、子どもの発達や自立という、より上位の観点に立った場合、当該の言葉と行為を適切に調整する必要がある。】この文書を拝見した時に、アプローチの方法には差異があっても、ベース（根幹）の思いは同じだと強く感じた。

３　幼稚園現場に必要なこと

本学には保育学院付属幼稚園が併設されており、園児はALTから英語を学んでいる。

幼少期の発達段階についても考える必要がある為、ルドルフ・シュタイナー（Rudolf Steiner）の発達論と合わせて考察してみることとする。

第１七年期（誕生から７歳頃まで）についてシュタイナーは次のように表現している。「子どもが七歳になるまでは、物質体と関係がある部分を育てることをめざすことになります。」[1)]「子どものまわりで起こることや子どもが知覚することは、すべて、子どもの肉体の器官にとって重要な意味を持ちます。なぜなら、子どものまわりで起こることは、肉体の器官を作り上げるように働きかけるからです。」[2)] と肉体形成の重要性を述べている。またこの時期の子どもの身体は、「感覚器官」と認識され、子どもは見たことや聞いたことを感覚で消化していく。子どもに感覚を含めた働きかけをすることが、教育の重要な視点であると説いている。更に脳の健全な形成に影響を及ぼす要因としては、「感覚的な印象」と「想像力への刺激」であるとしている。特に「想像力」は成長を促すものであり、身体の調子を合わせる力である。

シュタイナーは更に以下のようにも説いている。「子どもを取り巻く世界で生じることや、子どもの感覚が知覚することや、物質的な空間から子どもの霊的な力に働きかけてくるものがすべて含まれています。」[3)] と述べ、つまり人の道徳的な行為、不道徳な行為等も含まれると説いている。そうすると、保護者や保育者の対応の仕方・あり方が問題となる。特に保育者においては、適切な言葉遣いをし、何事にも感謝の気持ちを持ち、環境や人と上手に折り合いを付けて生活していけるような自覚が求められる。子どもたちに対し、言葉・音楽・リズムを十分に駆使して、想像力を高められる遊びや学習を実施することにより、健康な器官ができ、健康な身体が形成されると思われる。

上記の教えを総合すると、保護者・保育者・周囲の大人は、乳幼児の生命活動を守る為、あらゆる環境を整え、乳幼児が心身ともに逞しく成長するよう十分なケアをしていく必要がある。

4　終わりに

先ずは紀要作成に当たり、佐藤晶子先生（駒沢女子短期大学）、近藤千草先生（川村学園女子大学）の文書を拝見できたこと、並びに引用させて頂いたことに感謝いたします。また30年以上にわたり、外国語（英語）教育に携わることが出来たことに嬉しさを感じ、周りの教職員・関係者並びに卒業生･在校生に感謝したい。先輩の先生方から駆け出しの頃に教えて頂いたことをベースにして、“Own Material”を探し求め、外国語を「学ぶ」･「教える」ということの「楽しさ」･「嬉しさ」を知ることが出来た。今後は、生徒・学生よりも若い子どもたちに英語の「楽しさ」･「嬉しさ」を感じてもらえるように、“Kids English”へ新しいメソッドを吹き込んでいきたい。次回予告として、“Questionnaire”を利用して子どもたちの実際を探っていきたい。

References

文部科学省、資料２、幼稚園、小学校、中学校の教育課程等に関する論点

佐藤晶子、2019、「幼児が求める保育者像の探索－学生の豊かな保育者像の形成に向けて－」、駒沢女子短期大学研究紀要、第52号

近藤千草、2019、「ルドルフ・シュタイナーの発達論と教育実践に関する考察」川村学園女子大学研究紀要、第30巻、第１号

E･M･グルネリウス、高橋巌・高橋弘子訳、1999、「七歳までの人間教育　シュタイナー幼稚園と幼児教育」、フレーベル館

ルドルフ・シュタイナー、高橋巌訳、1985、「ルドルフ・シュタイナー教育講座第Ⅰ巻　教育の基礎としての一般人間学」、創林社

１）ルドルフ・シュタイナー、松浦賢訳、2000、「完全版　霊学の観点からの子どもの教育」、イザラ書房、p21

２）前掲書、p23

３）前掲書、p64

学校法人シュタイナー学園HP（URL：www.steiner.ed.jp/）